

Ⅲ キリスト教思想史の諸問題

後期オリエンテーション

<後期のテーマ>

キリスト教思想 → 思想史 → 宗教と科学の関係史、そして現代

<後期の講義予定>

Ⅱ：キリスト教思想史の諸問題

序論：宗教思想研究への招待—宗教と科学の関係史—	10/2
第1講：聖書の思想世界と科学	
1：創造論の諸問題—創造と契約—	9
2：知恵と終末	16
第2講：古代キリスト教	
1：ヘレニズム世界のキリスト教—「無からの創造」論—	23
2：キリスト教神学の成立とその諸問題	30
第3講：中世キリスト教と宗教改革	
1：自然神学と12世紀ルネサンス	11/6
2：宗教改革とガリレオ裁判	13
第4講：近代世界とキリスト教	
1：ニュートンとニュートン主義の自然神学	20
2：啓蒙的近代とキリスト教	27
3：進化論論争をめぐって	12/4
第5講：科学技術とキリスト教	
1：生命と環境	11
2：心と情報	1/8

学年末試験

試験期間中

<成績評価の基準>

夏期レポートと筆記試験（詳細は後日、講義にて指示）を総合して評価する。

序論：宗教思想研究への招待—宗教と科学の関係史—

(1) なぜ思想なのか

1. 前期講義との関係

宗教現象を見る二つの視点

1) 外から、客観的データの分析に基づいて → 前期講義 (現代宗教学)

宗教現象にアプローチするにはまず第一に考えられるべき方法論的態度ではあるが、対象を「深く」理解するには限界がある。初対面の人物を理解しようとする場合を考えよ。

2) 内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る

→ 後期講義 (宗教思想研究)

個人であろうと集団であろうと、その内面にまで迫る仕方では理解するには、その対象自身が意識的あるいは無意識的に外部へ発信してくる自己表現に注目する必要がある。この重要な一つの形態が「思想」に他ならない。

2. 思想? 思想!

思想に注目するとして、では「思想」とは何か。

まず、ここで避けた誤解は、思想というと一種の知識の習得をイメージするというものである。しかし、思想とは、第一義的には暗記の問題——思想家の言っていることを暗記する。プラトンはイデア論、イエスならば愛の思想などと——。むしろ、他者理解において問われるべき思想とは、その他者 (個人と集団)、生き方を決めているポリシーの問題 (思考方法、発想法、見方) である。

3. 思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。

思想を学ぶ際に、わたしたちは個性的で目立った個人 (ヒーロー) に注目することが多い。思想をテーマとした卒論や修論には、思想家個人の思想研究が多く見られる。

しかし、とくに宗教思想の場合に大切なのは、個人の思想形成の背後にある共同体である。個人の独創な思想の前提に、共同体において生きられている生のポリシー・スタイル (共有された生き方) が存在していることに留意しなければならない。もちろん、通常共同体の「思想」を解明することは容易ではない。なぜなら、共同体自体が自らの思想を語ることは稀だからである。しかし幸い、キリスト教には共同体の思想へアプローチする上で、貴重な資料である聖書が存在しており、それを手掛かりに信仰共同体である教会の思想へと考察を進めることが可能なのである。

4. 今年度は、キリスト教思想の中より、「キリスト教と自然科学」(宗教と科学) の関係論を取り上げたい。

(2) 聖書を読む

5. 聖書とは

では、共同体の思想の理解に向けて、聖書をどのように読んだらよいのであろうか。

すでに聖書については、前期の講義 (第7講) で必要な説明が行われたので——原典は古典語 (ヘブライ語とギリシャ語)、66の文書はそれぞれ別々の伝承過程の中で断片からより大きな単位へと収集され、最終的には編集を経て成立した——、ここでは、簡単に要点を確認するにとどめたい。

6. 正典そして聖書学

聖書は、その成立から現在に至るまで、キリスト教信仰共同体において共同体の規範的で権威ある文書として、つまり正典として読まれてきた。これが、聖書から共同体の思想を読み取るという方法論の根拠である。しかし、思想の解明あるいは理解には、批

判的な距離を置くことも同時に必要になる。聖書に書いてあることを反復するだけでは、思想を解明したというにはほど遠い。聖書の思想的歪みの批判的分析が聖書理解の前提の一つであると言わねばならない。この点で、聖書の思想の解明は、聖書学——聖書も人間が歴史的な脈の中で生み出した文書と考え、一般の書物と同じ方法で分析的に研究する近代的な学問——に基づいて行われることが必要になるのである。

したがって、この講義では、聖書学を基礎にしつつ、正典として読まれてきた経緯に留意する、ということが基本的なスタンスとなる。以下の聖書引用は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会）によって行われる。

7. なお、聖書の思想の議論に続いて、本講義では、この思想の歴史的展開（思想史）が古代から現代まで辿られるが、それは、思想が思想史（共同体あるいは個人の思想的営みの歴史的展開）と不可分であることに基づいている。宗教思想の第一義的な担い手としての共同体は、歴史的事実であり、歴史の担い手だからである。

8. 講義の順序

以上より、本講義は次の順序で進められる。

(1) 聖書の思考方法の解明

(2) 聖書の思考方法の歴史的な展開、「宗教と科学」との関わりという具体的な諸問題に即して

(3) 現代の倫理的諸問題（生命・環境・情報）に対するキリスト教思想の取り組み

9. 「原典のイメージ」は次頁に示すとおりであるが、掲載されたのは、以下のものである。

(1) 新約聖書

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*. Ed.XXVII, Deutsche Biblegesellschaft.

(2) 旧約聖書

Norman Henry Snaith, *Hebrew Old Testament*, The British and Foreign Bible Society.

